

会議名	東北地域 飼料イネシンポジウムー米どころでの飼料イネ生産と 耕畜連携のあり方を考えるー
開催日時	平成17年10月25(火) 13:00 - 17:00
開催場所	ぷらざおでって(岩手県盛岡市)
主催者	(独)農業・生物系特定産業技術研究機構東北農業研究センター
参加人数	約100人(民間・公立機関及び独法の研究者)
1. 会議の概要(500 - 1000字程度または議事内容の資料添付)	<p>東北地域でも1000ha近い飼料イネがWCS(ホールクロップサイレージ)として作付けされているが、解決を要する技術的課題も多い。そこでその利用と技術開発について情報交換し、普及拡大を図り、特に耕畜連携による資源循環型農業の展開という視点を加えて討論する。</p> <p>話題提供は7題、以下に略記する。「東北に適した飼料イネ品種と多収栽培(東北農研センター・渡邊寛明)」: 専用種の普及には至っていない。また、多くは移植方式で、直播栽培は試行中。飼料イネが必ずしも多収になっていないので施肥、雑草問題などの対応が必要。「水田輪作における飼料イネの位置づけ(宮城農試・星信幸)」: 古川地域で良質米生産、大豆生産団地の育成、安全安心な粗飼料確保を掲げて大豆跡のクリーニングクロップという位置づけで飼料イネ生産が指導実践されている事例が報告された。「新しい収穫・調製技術(東北農研センター・河本英憲)」: 排水が不良な水田でも作業可能な自脱型コンバインなどの走行部にクローラを装着した既存機械の汎用利用による予乾収穫体系を紹介した。また、新開発された細断型ロールペーラの飼料イネへの活用について紹介した。「酪農における飼料イネ給与の問題点と改善方策(畜草研・塩谷繁)」: これまでの研究成果を踏まえ飼料イネの泌乳牛への給与に関する特徴的な事項、例えば飼料特性、粗の消化性、給与量、飼料設計の留意点などを解説、さらに地域飼料として、TMR、耕畜連携との結びつきを展望した。「肉用牛への給与とメリット(北海道農研センター・篠田満)」: イネWCSの肉用牛、特に肥育牛への試験結果を示し、摂取量、血中ビタミンA及び血漿ビタミンE濃度への影響、枝肉成績を解説、肥育後期にはイネWCSを5 - 8kg摂取、血中ビタミンA濃度は正常、格付・脂肪の色は藁区と大差なく、自給率のアップが可能などの試験結果からの結論を示した。「東北地</p>

	<p>域における耕畜連携の現状と課題（東北農業センター・藤森英樹）：現場事例の調査結果から耕畜連携の類型を示すと共に、具体例を紹介して今後のあり方を示した。小区画、収量水準のばらつきなども多く、耕畜連携の地域での位置づけを明確にし、目標水準を設定して収量・品質の向上を反映した有益配分、低コスト化などの重要性が語られた。最後に「飼料イネ生産利用の現状と実用化に向けた課題」（中央農業総合研究センター・千田雅之）としてコメント的に締めくくりの話題提供があった（2に紹介）。</p>
<p>2．今後の研究開発分野として重要と思われる関連発表課題・話題提供名（分野と課題提供名ごとにその概要を200 400字程度）</p>	<p>前記、千田雅之の総括を中心に：飼料イネ作付面積が頭打ちないし減少傾向があり、その原因として1）現場で高収量技術が再現されていないことを上げ、その原因を品種選択、栽培など技術面だけでなく助成、取引など制度面からも原因を究明し、改善を図る。2）生産コストが乾物1kg100 - 120円に達し、流通乾草を大きく上回っていること。3）ユーザー（畜産農家）のWCSの評価と生産コストの間には2 - 6倍の乖離があること。4）さらにWCSの評価の低い理由としてハンドリングの不便さ、品質が一定していない、対象牛・発育ステージ応じた給与技術が確立していない等の理由を上げた。このまとめとして生産のコストと評価の差を縮める技術開発と営農現場に技術導入を促す仕組み作りを提案し、a 生産コスト低減技術 b WCS品質（評価）向上技術 c コスト低減・品質向上に機能する助成や取引、作業料金の設定 を上げた。その上で飼料イネ定着化のために生産コスト、評価価格の技術開発目標値を設定して技術開発を行うべきであるとした。</p>
<p>3．その他の発表で関心のあったもの（課題ごとに概要を400字程度）</p>	<p>前記渡邊寛明の報告の中で、飼料イネの栽培法に関連して直播栽培技術に言及している。低コスト化のためには直播栽培が欠かせない。これには湛水直播栽培と乾田直播栽培があるがそれぞれなお技術が確立したとはいえない点もある。ここでは具体的に問題点や課題が示されているので（具体的には資料参照）それらの解明が望まれる。</p> <p>なお、飼料イネ生産では雑草問題も大きな課題となってきている。特に直播栽培での除草メニューの充実を緊急の課題であると指摘した。</p>
<p>4．今後研究開発課題採択に当たって参考にすべき事項等</p>	<p>前記千田が整理したことを上げる</p> <p>1）生産コスト低減の技術開発として、収量向上技術導入（専用品種、堆肥還元など）、省力栽培技術導入（直播など）2）飼料イネ品質向上技術の開発（発酵品質の向上、飼料イネの機能性成分の解明、簡便な品質判定方法、給与技術の開発と給与効果の解明 3）</p>

	<p>コスト低減・品質向上に機能する取引システムの開発（生産量・品質に応じた助成制度、生産量に応じた作業料金及び飼料イネの取引、畜産農家の品質ニーズに応じた飼料イネの取引）</p> <p>飼料イネの研究レベルでの水準は大きく進展しているが、現場レベルでの水準とはかなりの乖離がある。それは技術そのものの不十分さとも云えるが、現場の環境と異なる点があるからであり、そのところを解明して、技術が導入される条件を明らかにし、必要に応じて技術そのものを改善してゆく、そんな検討をきめ細かく行っていく必要がある。その中には提案にあったように制度の面からアプローチしてゆく方法もあるであろう。</p>
5 . 報告者	太田 顯